KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

中級日本語教材作成のための接触場面アンケート調査（3）

著者	高屋敷 真人
雑誌名	関西外国語大学留学生別科日本語教育論集
巻	30
ページ	47-57
発行年	2020
URL	http://id.nii.ac.jp/1443/00007961/

中級日本語教材作成のための接触場面アンケート調査（3）

髙屋敷　真人

要旨

関西外国語大学留学生別科では、中級日本語コースの教材開発のため、留学生を対象にニーズ調査、及び、日本語接触場面に関するアンケート調査を行っている。本稿は、2020 年度のこうした調査の結果について報告するものである。この調査の目的は、彼らの実生活での日本語接触場面を調査し、日常生活で本当に必要とされる場面や文脈からのコミュニケーション運用能力を高めるためのシラバス・デザインや文法項目の設定を行うこと、更に、留学生の興味・関心、ニーズに対応し得る教材の改定を不断に行うことである。

【キーワード】　中級日本語、ポスト・メソッド、接触場面、シラバス・デザイン、日本語教科書

1.　はじめに：本調査の概要

本調査は、関西外国語大学留学生別科中級前期日本語コース（日本語 5: Japanese、以下、JPN5）において、毎学期、本学の交換留学生を対象に行っている日本語接触場面に関する実態調査である。調査対象の留学生は、中級前期レベル（JPN5）で学ぶ北米を中心とした英語圏からの留学生で、前回までの調査報告（2018 年、2019 年）では、まず、2018 年に質問紙によるアンケート調査で、「どのような場面で日本語を使用したいか」、「何について話したいか」という問いについての回答を分析した（髙屋敷 2019）。　この調査で明らかになったことは、英語圏からの中級レベルの留学生においては、「レストランで注文する」「ホテルの予約をする」など特定場面での談話練習ではなく、日常生活一般で日本人と日本語を話したいと回答した留学生、つまり、日本人、特に日本人の友人（大学生）との「雑談」がしたいという留学生が一番多い（65%以上）ということであった。日本語の使用場面では、次に、日本語を将来の自

分のキャリアで使用したいという回答も多く、翻訳者／通訳者を目指したいという学生も多かった。

では､友人とどのような話題で会話をしたいのかについては､｢スポーツ｣､｢音楽｣､｢ゲーム｣､｢漫画／アニメ｣､｢映画／TV ドラマ｣という回答がどの学期も多かった。しかし、2018 年度は、学期によって、「ハイキング」、「Netflix」、「K-POP」、「料理／食べ物」が多い時もあり、当然のことながら、学期ごとに学生のニーズ、興味・関心には大きな違いがあることも分かった。そのような理由で、教員は、その時点で完成しているコース教材に満足することなく、毎学期の調査結果から得た学生の興味・関心に沿うように、文型や本文の会話内容を不断に更新する態度を持つことが理想であることも提唱した。

2019 年の報告では、留学生のニーズと興味・関心を調べる質問紙による事前調査に加え、ログシート（日本語活動日記）を用い、より詳しく具体的な日本語接触場面調査を行った（髙屋敷 2020）。この調査は、15 週間の学期中、大きな試験がある週を除いた 7 週間、それぞれの週の終わりにログシート（日本語活動日記）を配布し、1 週間の日常の日本語接触場面を記録させ、宿題として提出させる形で行われた。

ログシートを使用した接触場面の調査時期は、2019 年春学期（2 月から 5 月）で、調査対象者は、JPN5 の 2 クラスの学生（北米を中心とする英語圏からの留学生）24 名である。学期中、留学生に教室以外でどのように日本語を使用したかを日記形式で記録させ、「いつ、どこで、誰と何をしたか」という対人接触に加え、日本語で接触した物的接触（映画、SNS、アプリ、本等）についても記録させた。

2019 年の調査結果でも、留学生の一番多い回答は、特定はできないがとにかく日常生活での「雑談」であるという回答が一番多かった。また、将来、何らかの形で自分の「仕事」で日本語を使用したいと考えている学生も「雑談」と同数であった。前年と同様、翻訳者になりたいという学生も一定程度見られたので、今後の中級日本語シラバス改訂の際には、この結果を反映して、日本国内での友人との雑談を想定した、くだけた会話のテクニック、将来、日本で仕事に就くことを想定した日本語を使用したビジネス会話、簡単な翻訳や通訳のテクニックなどもコースに組み込んでいく必要があることが分かった。

2019 年度の留学生の興味・関心は、2017 年からの毎学期の調査結果と比較してみると、「スポーツ」、「ゲーム」、「漫画/アニメ」については、例年通りだが、毎学期、

人気の高い「音楽（J-POP)」、「映画／TV ドラマ」がこの年は低く、逆に、「料理／食べ物」や「読書（文学)」に興味がある留学生が多かった。このような学期によって特化した傾向については、教師が事前にしっかり把握しコース教材を更新する必要性を指摘した。

留学生の対人接触、つまり、どのような日本人と会話をしているかについては、ステイ先の家族（特にステイ先の母親）との接触、日本人の友人との接触が突出して多かった。これに対して、友人やホームステイ家族以外の日本人との接触は、飲食店スタッフなどとの接触が学期中に数回程度あるだけで、事前の予想より多くないことが分かった。つまり、「駅員に切符の買い方を尋ねる」「ファストフード店で注文する」などの特定場面での接触は、教員が想像するほど多くなかった。この点についての詳しい調査は今後のフォローアップ・インタビューで、更に明らかにしていきたいと考えていたが、2020 年度はコロナ禍で、関西外大留学生別科の日本語コースも春学期の途中からオンライン授業に切り替わったため、行うことが出来なかった。

今までの調査で、明らかになったことは、当然のことながら学生の興味・関心は常に変動しているということ、特定場面での「駅で切符を買う」「メニューについて尋ねる」「レストランで注文する」などのコミュニケーションの遂行というより、日本人の友人やホストファミリーとの「特定の課題の遂行を目的としていない単なるおしゃべり」（西郷・清水 2018）をしたがっているということである。この結果から、今後のシラバス改訂の際には、友人とのくだけた会話、具体的には相槌や音声変化のルール、助詞の省略、聞き返し、繰り返しなどのインフォーマル・スピーチでの会話技術に加え、ビジネスに必要なフォーマルなコミュニケーション場面などにも重点を置き、フォーマルなスピーチスタイルでの会話技術についてもシラバスに盛り込んで行く必要性があることが明確になった。

2. 2020 年度の調査結果

2020 年度は、前述した通り、コロナ禍の影響で、関西外大留学生別科も春学期の中途である 2 月下旬から急遽オンライン授業に切り替えとなり、北米を主体とする留学生も帰国する学生が多かった。そのため、予定していたログシート、インタビューによる詳細な接触場面調査を行うことが出来なかった。9 月からの秋学期でも、留学生が来日できず、アメリカ、ヨーロッパにいる学生と ZOOM を使用したオンライ

ン授業による開講となった。このような経緯で、本稿は、質問紙によるアンケート調査の結果の報告のみになることを了承願いたい。

質問紙を使用したアンケート調査時期は、2020 年春学期（2 月から 5 月）と秋学期（9 月から 12 月）で、調査対象者は、JPN5 を履修した学生、35 名である。留学生のジェンダー、国籍は下記の通りである。留学生の母語は多岐に渡っているが、英語でコミュニケーション出来ることが関西外国語大学留学生別科における交換留学の要件の一つであるので、全員、英語も堪能である。

ジェンダー:	男子学生 14 名、女子学生 21 名
国籍:	アメリカ 18 名、カナダ 4 名、トルコ 3 名、 ドイツ 2 名、オランダ 2 名、 オーストラリア、ロシア、ラトビア各 1 名 マレーシア、タイ各 1 名（両名ともアメリカに留学中）
母語:	英語 19 名、トルコ語 3 名、ドイツ語 2 名、スペイン語 2 名、 ロシア語 2 名、オランダ語 2 名 中国語、タイ語、アルバニア語、モン語各 1 名

調査対象者の主な専攻は、下記の通りである。

専攻：	日本語／日本研究	10 名
	アジア研究／東アジア研究	4 名
	国際研究/国際関係	3 名
	ビジネス	3 名
	経済	3 名
	マーケティング	2 名
	自然科学	2 名
	IT／コンピューター	2 名

「その他各 1 名」の内訳は、メディアアート、フィルム／TV、グローバル・コミュニケーション、生物学、人類学、心理学、獣医学、英語、経営学、言語学である。

では、まず質問紙による「どのような場面で日本語を使用したいか？」という問いについてのアンケート調査の結果を図 1 に示した。

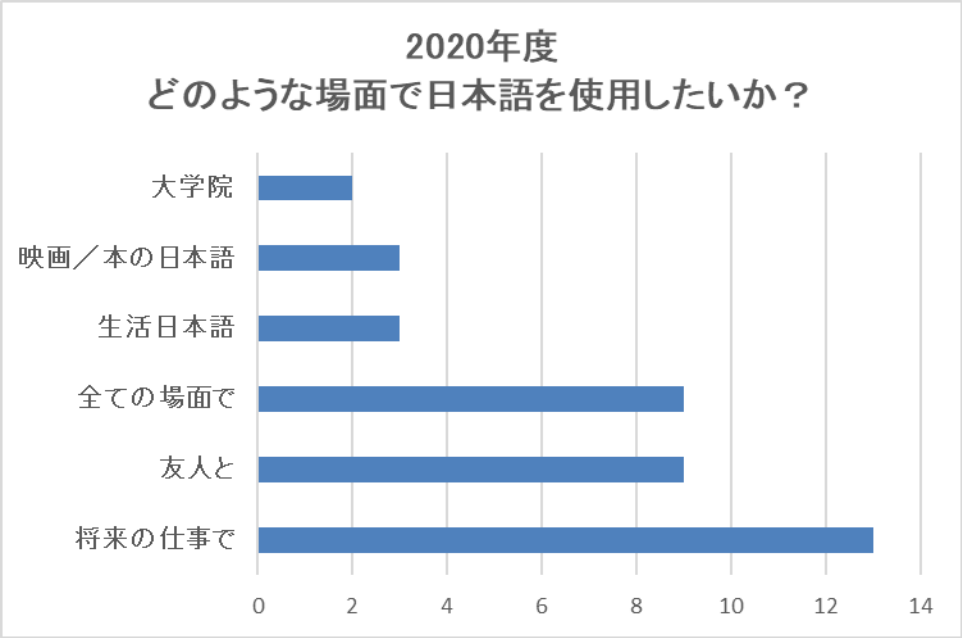

図 1「2020 年度：どのような場面で日本語を使用したいか？」

図 1 によると、留学生の一番多い回答は、「将来の仕事で日本語を使用したい」で 13 名であった。どのような仕事をしたいのかについては、「今は具体的にわからない」という学生が多かったが、希望する職種の回答があったものは、日本語教師 2 名、翻訳家 2 名、ホテル業務 1 名、映画製作 1 名であった。次に、日常生活で「友人と話したい」、「全ての場面で」と答えた学生が 9 名ずつおり、それに「生活日本語」と回答した 3 名を加えると、21 名の学生が「特定できないがとにかく日本語で話したい」と答えている。その他の回答は、「自分の母（日本人）と話したい」「ホームステイで」「レストランで注文」「電車の中で雑談」「どの電車に乗ればいいか尋ねる」「ホテルのアルバイトで」「旅行全般で」「ゲームの日本語」「JET プログラムで」「日本語能力検定試験 N1/N2 の日本語」と回答した学生が各 1 名であった。

上の調査結果については、見ての通り、2017 年度から引き続き同様の傾向が見られた。2020 年度も「明確な場面は特定できないが日常生活全般でとにかく日本語を

使いたい」と回答した学生が、「日本人の友人」（9 名）と「すべての場面で」（9 名）を併せて全体の 60%と最も多かった。また、将来の仕事で使うために日本語を学習している学生も「JET プログラム」と答えた学生もこれに加えると、35 名中 14 名で、約 40%の学生が将来のキャリアに日本語を活かしたいと考えていることが分かった。

この結果から、前述したように、今後の中級日本語シラバス改訂の際には、このような学生のニーズを考慮し、友人との雑談時のくだけた会話での音韻変化、省略のルール、相槌などの使い方、更に、敬語を用いたビジネス会話など、話す相手によってスピーチレベルを変えつつコミュニケーションを遂行する能力の向上などを盛り込んでいく必要があることが再確認された。また、現行の教科書のコンテントに加えて、事前にコース・リソースとして「日本語能力試験 N２レベルの文型練習」、「アカデミック・ジャパニーズ」、「翻訳」などに重点を置いた教室活動も準備しておき、学期ごとに調査の結果を分析し、その時の学生のニーズが高ければ、随時、必要に応じて柔軟にシラバスを更新して行く態度も必要であるのではないかと思われた。

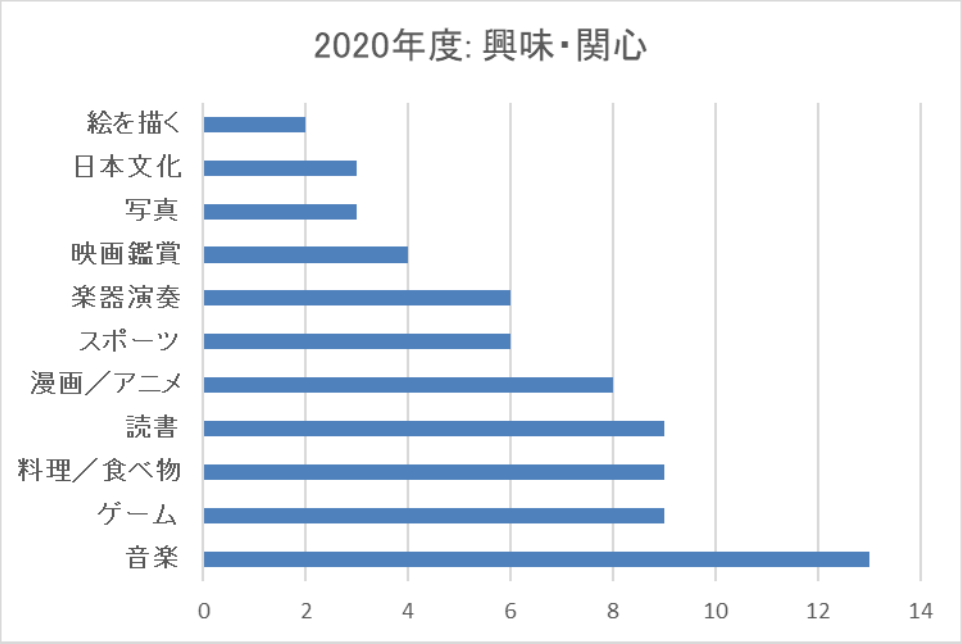

図 2「2020 年度：興味・関心」

では、図 2 で、2020 年度の学生の興味・関心について見てみよう。2020 年の留学生の興味・関心事は、「音楽」が一番多く、この中には、J-POP、カラオケなども含ま

れる。2020 年の傾向では、昨今の K-POP 人気を反映してか、K-POP をよく聞くと回答する学生が散見された。それに続き、「ゲーム」、「料理／食べ物」、「読書」が同数の 9 名で上位を占めた。「ゲーム」はビデオ／TV ゲーム、オンラインゲームなどである。この中には、日本製のゲームを日本語でしているので、その時に使用する日本語を学びたいという学生もいた。「料理／食べ物」では、和食のうち、特にラーメンが好きという学生が 2 名、ビール／日本酒が 2 名、寿司が 1 名という結果であった。今学期は、例年と比較し、「読書」と回答した学生が 9 名と多かった。そのうち 3 名が日本文学に興味があると回答している。「漫画／アニメ」と回答した学生は、例年より若干少なく 8 名であった。続いて、「楽器演奏」が 6 名で、内訳はピアノ 3 名、サックス、バイオリン、ドラムが各 1 名であった。同数の 6 名で「スポーツ」が続き、内訳はサーフィンが 3 名、登山、クリケット、弓道が各 1 名であった。「映画鑑賞」の 4 名では、スタジオ・ジブリの作品、最近、留学生の間でも人気を博している新海誠の『君の名は』、『天気の子』を挙げる学生がいた。写真と回答している 3 名は、Instagram など SNS への投稿のために写真を撮っていることがうかがわれた。2020 年度は、学生の興味・関心が多岐に渡り、その他 1 名のみの回答も多かった。具体的には、「車」「動物」「初音ミク」「ヨガ」「関西弁」「茶の湯」「和太鼓」「散歩」「トレカ」「古い町」「温泉」「編み物」「日本製万年筆」「歴史」「宗教」「経済」などである。アニメや J-POP に限らず、日本文化、日本社会全般に広く興味を持ちつつ日本語を学習している留学生が多いことがうかがえる。

今回の結果と前回までの 2017 年からの学期ごとの結果（髙屋敷 2019／2020）と比較してみると、例年一番人気の「スポーツ」、「映画／TV ドラマ」への関心がそれ程高くなく、昨年は「音楽」、「料理／食べ物」、「読書」に興味がある留学生が多いことが分かった。「料理／食べ物」については、一昨年に引き続き高い関心を持っていることが分かった。留学生の興味・関心は、上述したようにある一定の傾向はあるが、学期によって特化した結果になることも把握した上で、コース教材に適宜、柔軟に改訂を加えて行く必要性を改めて感じた。

深澤・本田は、日本国内と海外の日本語学習者を比較し、「日本国内での日本語学習の目的は、来日や日本在留の目的に大きく関係し、それに必要な日本語学習がニーズとして挙げられることが想像されるのに対し、海外での日本語学習者は、実利的な目的よりも日本のマンガやアニメ人気を背景とした日本や日本語への興味にニーズ

があることがうかがわれます。」と指摘している（深澤・本田 2019）。これまでの調査から、関西外大留学生別科の留学生（北米を中心とする英語圏からの中級学習者）の多くは、将来のキャリアのためにという実利的な目的だけではなく、海外の日本語学習者と同様に、漫画／アニメ、J-POP などに代表される日本文化／社会そのものへの興味が来日の強い動機になり、来日してからも持ち続けていることが明らかになったと言えよう。

3. 関西外国語大学の日本人学生の興味・関心

前章で 2020 年度の関西外大留学生別科の留学生の興味･関心について報告したが、本章では同年代の日本人学生の興味･関心と比較し、相違点などを明らかにしてみたい。2020 年度秋学期で私が担当した「日本語教授法 A」を履修した日本人の学生にも質問紙による「興味・関心」のアンケート調査を行ってみた。回答者は 47 名で、男子学生 12 名、女子学生が 35 名である。学年は、3 年生が 34 名、4 年生が 13 名であったが、回答者は 20 歳前後の学生で、本学の留学生とほぼ同年齢であると推察される。調査対象者の学科は、下記の通りである。

英米語学科	23 名
英語国際学科	11 名
スペイン語学科	5 名
英語キャリア学科	3 名

図 3 を参照してみると、留学生の興味・関心と比べ、明らかな違いがあることが分かった。日本人学生では、「音楽」という回答が一番多く、内訳として K-POP、洋楽、ラテン音楽というジャンルが散見された。次に多いのが「楽器演奏」の 13 名で、主な内訳は、ギター3 名、ピアノ 2 名、バイオリン、トロンボーン、ウクレレが各 1 名であった。軽音楽部、吹奏楽部に所属している学生もいた。次に「映画鑑賞」「スポーツ」が 11 名で続き、観ている映画では、「ハリーポッター」シリーズ、「スターウォーズ」シリーズという回答が見られた。スポーツでは、スノーボード 3 名の他は、サッカー、ロードバイク、野球、剣道、サーフィン、卓球、合気道など多岐に渡った。これにダンス 2 名、ヨガ 1 名、筋トレ 3 名を加えると、体を動かすことが好きだと

いう学生が多いことが分かった。このあたりまでは、留学生との共通性も見られるが、次に多い「旅行」（9 名）は、留学生では 2 名に留まっていた。「料理／食べ物」（7 名）では、お菓子作り、スパイスカレー店巡り、和菓子、コーヒー、ラーメンなどの回答があった。同数の「読書」（7 名）では、留学生が回答している文学作品ではなく、ライトノベル、自己啓発本という回答が散見された。日本人学生の文学離れの傾向が見受けられる。「ドラマ」（6 名）は、日本の TV ドラマではなく、Netflix などで韓国ドラマや海外のドラマシリーズを視聴するとのことであった。「絵を描く」（6 名）では、イラストや似顔絵などを描くという回答があった。

留学生に人気のある「漫画／アニメ」は、日本人学生では 4 名、「ゲーム」は 2 名に止まり、この分野で留学生と日本人学生とで大きな違いが見られた。最近、人気を博している『鬼滅の刃』と回答した学生も 1 名にとどまった。日本人学生の回答で「お笑い」（3 名）というのもあり、留学生の 1 名（『ダウンタウンのガキの使い』）に比べ、やや多かった。日本の「お笑い」を理解するのは、中級前期の JPN5 レベルでは難しいことが推測される。この「お笑い」と答えた日本人学生は、お気に入りの漫才師をテレビではなく、動画サイトで視聴していることも分かった。また、これに加えて、昨今の特徴的な回答として、動画作成／動画視聴／YouTube 視聴という回答者も 3 名おり、前述の「ドラマ」の視聴方法と同様、日本人学生のテレビ離れという傾向も明らかになった。その他、1～2 名のみの回答は、「バイク／車」「ミュージカル」「天体観測」「手芸」「買い物」「カフェ巡り」「神社仏閣巡り（御朱印集め）」「散歩」などである。「車／バイク」や「買い物」などは、もう少し関心が高いと思っていたが、昨今の日本人学生には人気がないようである。コロナ禍の影響で、外出を自粛していることも一因だと思われるが、想定よりかなり低い結果となった。

このアンケート調査の結果から、「音楽」「スポーツ」「映画鑑賞」「料理／食べ物」などは留学生と日本人学生の共通の話題になり得るが、「漫画／アニメ」「ゲーム」については、日本人学生には関心の薄い話題であることが分かった。今までの調査結果から留学生の多くが日本語を使用したいのは「日本人の友人」との「雑談」であることが明らかになっているが、実際にどのような話題について話したいのか、今後、より詳細な調査を続けていきたい。普段の留学生の動向を見る限り、「最近観た映画／ドラマ」「最近行ったところ」「最近食べたもの」「恋愛」などの話題ではないかと想像するが、これはやはり教師側からの視点であるので、実際のところどうなのかはや

はり調査をしてみなければわからないだろう。留学生が日本人と話したいと思っている話題を教材に組み込めば、日本語学習への動機も更に高まるだろうと期待している。

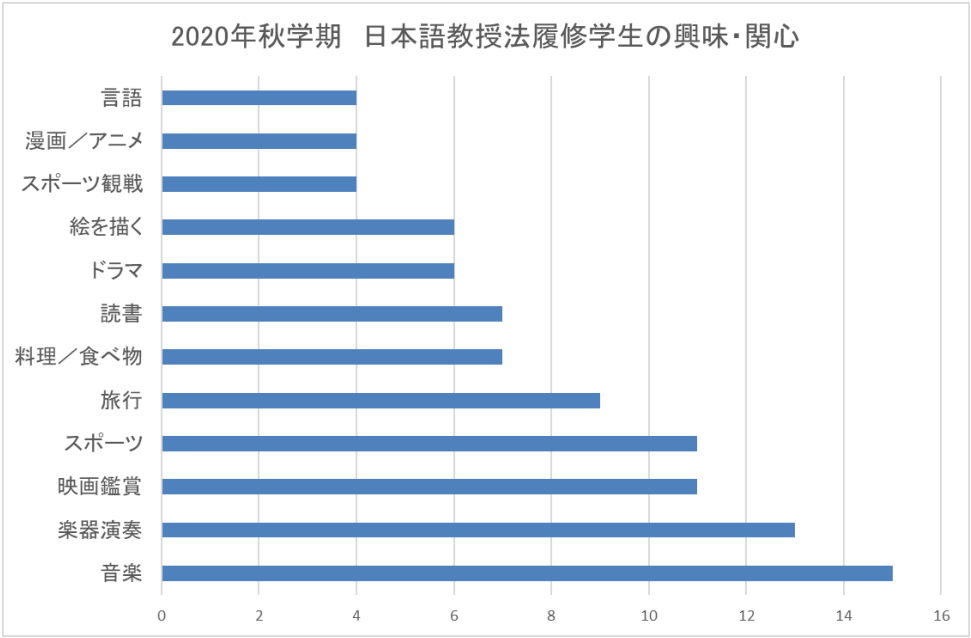

図 3「2020 年度：日本語教授法を履修した日本人学生の興味・関心」

4. おわりに

コロナ禍の影響で、現時点で、2021 年度中に対面授業ができるかどうか分からない状態ではあるが、コロナ禍が収束した際には、2020 年度にはできなかったログシートによる日本語接触場面調査に加えて、質問紙のアンケート調査の結果についてフォローアップ・インタビューも行い、日本人の友人をはじめとした日本人全般との生活場面での接触場面において、留学生がどのようなコミュニケーション能力を得たいと思っているのか、更に詳しく調査していく予定である。また、昨年、調査が出来なかった特定場面での接触の少なさ、すなわち、友人以外の日本人（飲食店の店員など）との接触が少ない理由などについてもインタビュー等ができる状態であれば、明らかにしていきたい。また、将来のキャリアで日本語を使用したいと回答している留学生も多いので、友人とのインフォーマルな場面での会話練習ばかりではなく、フォーマルな場面での会話練習、ビジネス会話なども加えていければと思っている。

鮎澤は、オーディオリンガル・メソッド（ALM）からコミュニカティブ・アプローチ（CLT）の時代を経て、ポスト・メソッドの時代に突入しているとし、「21 世紀に入り、学習者、そのニーズ、学習目的がますます多様化してきています。」と述べている（鮎澤 2014）。更に、「ポスト・メソッドの時代に日本語教師を目指す皆さんには、自分の学習者のニーズを把握し、現場の状況に合わせて、さまざまな教授法から学べる点は学び、使える部分をうまく組み合わせ、新たな工夫を加えて指導に活かすという柔軟性、創造性が求められている」と指摘している（鮎澤 2014）。今までの調査結果からも見てとれるように、昨今、学習者の興味・関心、ニーズは、一年どころか学期によって目まぐるしく変化流動している。そのような状況下で、学習者中心の日本語教育を遂行していくためには、学習者のニーズをより詳細に調べ、そのニーズに即したコースを不断に模索する必要性があるだろう。学習者が希望する日本語接触場面でのコミュニケーション能力の育成、学習者が好む教室活動、そして、学習者の要望に応える技能の習得を実現するためにはより精密なニーズ調査、接触場面調査とその分析結果に即した柔軟なシラバス・デザインが不可欠であると思われる。今後も学期ごとに留学生の興味・関心、ニーズがどこにあるのか綿密な調査を続け、留学生が望む接触場面での言語習得の可能性を実現していくために、教科書・教室活動の更新を不断に、そして、柔軟に行っていければと考えている。

参考文献

鮎澤孝子編（2014）『日本語教育実践』凡人社、30-47.

西郷秀樹・清水崇文（2018）『日常会話がグーンとアップする雑談指導のススメ』凡人社

髙屋敷真人（2019）「中級日本語教材作成のための接触場面アンケート調査」『関西外国語大学留学生別科日本語論集』28 号、49-65.

髙屋敷真人（2020）「中級日本語教材作成のための接触場面アンケート調査（2）」『関西外国語大学留学生別科日本語論集』29 号、31-45.

深澤のぞみ・本田弘之（2019）『日本語を教えるための教材研究入門』くろしお出版、67-68.

（mtakayas@kansaigaidai.ac.jp）